

一 兵要地理資料集録（渡邊正氏資料）解説

高木 勲

旧日本陸軍の兵要地誌は、明治の建軍以来常に外征軍の予想戦場となるべき滿洲、蒙古、支那、ロシア等のアジア大陸を实地踏査し記録編集することであった。しかし、大東亜戦争勃発以来、戦域は調査未了のまま南方方面に拡大し、やがて戦況不利となるに及んで本土決戦必至の情勢となってきた。

昭和十九年十月、大本營第二部參謀（のちに兵要地誌担当）に渡邊正少佐が着任するや、画期的に広く学者の協力を得て軍民一体の総力戦態勢をとるようになった。

その頃に整備された兵要地誌資料や関連文書は終戦の混乱で四散したが一部は残されていた。いわゆる渡邊正氏資料とは次の六時期に区分して整理することができる。

- 一 大東亜戦争末期に本土決戦に備えて計画実施された兵要地理調査研究会に関する資料
 - 二 終戦時における地図等の焼却処理に関する資料
 - 三 陸地測量部組織の処理と内務省地理調査所設立に関する資料
 - 四 戦後進駐軍との折衝に関する資料
 - 五 兵要地誌に関する資料
 - 六 その他（参考資料等）
- 以下、各区分に従って資料の内容を解説する。

一 大東亜戦争末期に本土決戦に備えて計画実施された兵要地理調査研究会に関する資料

昭和二十年四月～八月終戦までの間の資料

一 「部外関係者ノ統合利用ニヨル兵要地理調査研究会合ノ件通牒」 「極秘」

作成者第四班 B5・B4 タイプ 昭和二〇・四・二五
三枚

本土決戦を間近にして必勝の戦略戦術をとるため、兵要地理の整備が極めて重要である。基礎的な知識の乏しい者が作戦的着眼だけで成果を期待するのは危険である。また時宜に合わない調査研究や学者的理論も作戦には適さない。この際有能な地理学者を同志的に糾合し、軍学協力して本土の兵要地理調査をすることによって、戦局打開の勝ち目を見出したいというのがこの会合の趣旨である。

渡邊參謀は、まず東大の多田文男氏と協議し、同氏から辻村太郎氏へ次いで文理大の田中啓爾氏、さらに各大学などの地理学者十数名の推薦を得た。その際旧知の渡邊光氏（曾て陸軍予科士官学校在勤）の側面的協力も得た。

第一次会合は昭和二十年四月三十日に行われたが、第二次は戦局の急転により開催されなかった。この様な画期的な地理学者と軍との会合はこれが最初で最後であった。

なお、第一次会合当日に参集者に配布された文書（佐藤久氏所蔵）では、本文書の標題が「部外関係者ノ統合ニヨル兵要地理調査研究会合」

となっている。

一 二「第一次兵要地理研究会合行事予定表」

作成者第四班 B 4 ガリ版 昭和二〇・四・三〇 二枚

本資料は一一の付属の予定表および参集者名簿である。

場所は構内の高等官集会所において、部長、課(班)長、関係部員参集。

第四班渡辺少佐司会および趣旨説明、辻村博士代表挨拶、参集者個別紹介。研究題目付与担任決定などが行われた(口絵写真参照)。

一 三「兵要地理研究課題決定要領」

作成者第四班 257×762 タイプ 昭和二〇・四・三

〇 一枚

本資料は一一の付属の研究課題と実施分担表である。

食糧自活の考察、工業立地、地下施設問題、資源分布と軍需生産。海岸より内陸への道路、鉄道網。敵の本土分断構想(住民心理思想の地域差、人文地理的歴史地理的考察)、敵の本土上陸企図判断(気象を含む)、上陸防御の見地から地形の築城的観察。対戦車戦闘上の地形研究。本土を中心とした航空気象上の特性、航空基地の適地、など項目別に担当者を決定。提出期限は五月十三日とされている(口絵写真参照)。

一 四「謝礼金支払相成度件」

作成者第六課 B 5 ペン書 昭和二〇・八・八 三枚

第一次兵要地理調査研究会のこの時期までに完成した資料目録と個々の地理学者(個人別一覽表)への謝礼金合計三、五〇〇円を予算のある第六課(当時支那担当)から支出された。成果品は残っていない。

一 五「帝国本土分布図目録」

作成者第四班 B 5・B 4 ペン書 日付不詳 六枚

前項の更に詳細な成果品目録と思われる。上陸適地、道路網図、食糧関係の成果図など地誌図作成の学者の分担(上記謝礼金)の内容、および部内作業の現況など。現実には成果品は終戦時焼却されたものも、学者の手許に残ったものもあったと思われる。

二 一「終戦時における地図等の焼却処理に関する資料」

昭和二十年八月十五日〜二十日の間の資料

二 一「陸軍秘密書類焼却二関スル件「軍事機密」」

発信者参謀総長 B 5 タイプ 昭和二〇・八・一五 一枚

終戦直後の秘密書類焼却に関する根拠文書、「その他重要と認むる書類」に地図、兵要地誌を含んでいる。

二 二「情勢ノ変転ニ伴フ作戰用地図処理要領ノ件通牒「軍事機密」」

発信者総務課長 B 5・B 4 ペン書 昭和二〇・八・一九

八枚

終戦の四日後軍事極秘以上の地図、地誌図は焼却し、極秘以下は残

置する、など細部の指示を与えている。

紙の地図は焼却するが、原版（銅版）は残置すると明記してある。

参謀本部、部隊・官衛・学校、陸地測量部、民間印刷会社別に細部記載されている（口絵写真参照）。

二二「兵要地誌資料目録」

作成者渡辺少佐 B5 ペン書 昭和二〇・八・二〇 四枚

前記二二の焼却すべき地誌図目録の一部と推測される。

本土における砂丘分布図ほか十九点の目録。

三 陸地測量部組織の処理と内務省地理調査所設立に関する資料

昭和二十年八月十九日～昭和二十一年三月頃までの資料

三二「終戦二件フ陸地測量部処理要綱案」極秘（原稿）

作成者渡辺少佐 B5 鉛筆書 昭和二〇・八・一七 一〇

枚

終戦の翌々日の深夜渡辺参謀が不眠不休で起草した原稿であり、陸地測量部の処置を案じて具申されたものである。

その趣旨は以下の通りである。終戦の現実直面し「陸地測量部」は軍の一部として当然存在は許されない。まず職員の身分を保全してほしい。次に組織としては米軍に接収されるであろうが、国土の復興は一日も休むことはできない。従って軍の組織から急ぎ平時組織の内務省に移管し、名称も「陸地測量部」以外の名称に改め、軍人は速や

かに去り職員は引き続きその職務を継続し、組織としては以前からあったごとく認識させて米軍と交渉して欲しい。

この原稿を書記が清書して上司の第二部長有末精三中将に上申された。

終戦の二三日後のこの時期は日本中が大混乱に陥っていた。特に大本営は陸軍の組織の解体、書類の焼却、復員や米軍の接収対策等で陸地測量部の将来まで考える余裕はなかった。この意見具申書を読んだ有末部長は「渡辺参謀に任す」と一任されたので、渡辺参謀は旧軍の測量主体の名称よりも国土復興には「地理」を主体とすることが重要と考え「地理調査所」の名称を発案し、この案で有末部長の承認を得、次いで移譲を受ける内務省国土局の岩沢忠恭局長の承認を得て、ここに「地理調査所」の名称が誕生したのである。

この案に従って事務的に急遽八月三十一日に陸地測量部（部長大前憲三郎中将）が廃止され、米軍の接収前の九月一日付で内務省地理調査所が設立された。

所長には当初陸地測量部技師の武藤勝彦氏を推薦したが、本人が固辞したので止むなく岩沢国土局長が兼務で任命され、年末に武藤勝彦氏が就任した。

軍の組織である「陸地測量部」が米軍に接収解体されずに「地理調査所」から現在の「国土地理院」に引き継がれているのも、その淵源はここにあったのである（口絵写真参照）。

三二「地理調査所関係事項中担任実施業務概要」

作成者第一復員省 B 4 タイプ 昭和二・三・一 一枚

終戦の翌年三月、第一復員省（参謀本部の残務整理業務を含む）と、新設の地理調査所との業務分担を渡辺氏が記したものである。

即ち、本土以外の地図・兵要地誌、外地の測量部隊、本土の兵要地誌、その他連合軍の指令によるもの等は旧参謀本部の業務として第一復員省が担当する。

四 戦後進駐軍との折衝に関する資料

終戦〜昭和二十三年頃までの資料

対進駐軍関連で断片的で脈絡のないもの、公表に値しないものについては省略した。

四 一 「兵要地理調査」関連回答資料

作成者第一復員省 B 4 タイプ 一九四六・四・一五 一

○枚

第一復員省で旧参謀本部に関するGHQからの要求に対する回答。

ここでは旧陸軍の兵要地誌作成に関する方針、範囲、調査要領等が要約されている。

過去においては、ソ連。中国等を重点的に整備しており、米英すなわち南方方面は殆ど整備されておらず、開戦後俄に収集整備されたものである。その手段としてドイツ等から得た情報が多い。これらに関するは、一九四六・一・三〇に防諜部マッシュューズ少佐に報告してある。

調査要領は、予想される戦場を具体的に判断するため、戦術的には

地形、地質、気象、水運、通信、航空、築城、衛生、宿泊給養等について。戦略的（国防上）には、資源、工業、経済状態、住民、教育、思想、宗教、行政司法、運輸通信等広範囲に亘る調査整備が必要である。

既刊の刊行物は、支那関係は省別にかなり詳しく調査整備されており、米英関係ではマレー・ビルマ・フィリピンは戦前と戦時中にほぼ整備された。ジャワ・スマトラ・ボルネオ・アリューシャンは開戦後に調査し整備中であり、仏印・タイ・ニューギニアは不十分であった。南洋諸島は海軍担当である。

地図は、地上作戦用として十万分一を主とし五万分一、二十万分一、五十万分一も使用した。ニューギニア・ソロモンの地図は間に合わなかった。

支那関係は概ね師団・旅団クラスまで各省兵要地誌が配布され、現地軍では作戦地誌資料として補備作成された。

五 兵要地誌に関する資料

昭和二十一年〜二十四年頃の資料

五 一 「日本本土兵要地誌調査要領に対する私見」

作成者渡辺正 B 4 タイプ 昭和二四・六・二三 二枚

第一復員省において渡辺氏が私見を上司に提出したものの、その後は不明。以下要約

○ 自然、人文地理要素をもれなく調査し、その重点を明らかにす

る。

- 戦争指導上（総動員用）必要な事項及び作戦指導上（用兵戦術上）必要な事項に即応する着眼と内容をもって調査する。
- 具体的項目は、地形、地質、海岸、陸水、海洋、気象、交通、通信、航空、都市、住民、衛生、資源、農業など。
- 表現は兵要地誌図表としたほうがよい。
- 官民有識者と少数の有能な基幹人員で運営するのがよい。

五二「兵要地誌保管目録（史実部）」【秘】

作成者史実部 B5 カーボン 日付不詳 五枚

作成年月日不明、ある時期に第一復員省の史実部に存在保管されていた目録である。内容は気象兵要地誌第六巻ほか五十項目。

五三「兵要地誌調査要目（元参謀本部渡辺少佐記述）兵要地誌調査要領ノ参考」

作成責任者元渡辺少佐 B4・B5 カーボン 日付不詳
二三枚

折角企画した本土の兵要地誌も、敗戦で日の目を見ることができなかった。何とかこの思想と遺産を後世に遺さんと渡辺氏の発案で地理学者に作成させた。内容は二篇十三章。連合軍司令部にも提出された。昭和二十一〜二十四年頃、表紙には渡辺少佐記述とあるが本人は記憶がない由、執筆者の地理学者は不明。

五四「調査要項」（冊子）

作成責任者元渡辺少佐 執筆者不明 203×328 ガリ
版 日付不詳 八枚

趣旨は五二三と同じ

一般的地誌の調査項目と思われる。内容は十九節八十六項からなる。

五五「別冊 作戦に関する地理的重要事項」（冊子）

作成責任者元渡辺少佐 執筆者不明 203×328 ガリ
版 日付不詳 一五枚

趣旨は五二三と同じ

五―四を更に作戦的に詳述したものとされるが、章・節建てが、やや異なるので別の学者が作成したものではないか、とくに森林・植物が詳述されている。十六章八十八項からなる。

五六「兵用日本地理総目次」（冊子）

作成責任者元渡辺少佐 執筆者不明 203×328 ガリ
版 日付不詳 八枚

趣旨は五二三と同じ

現実には目次だけで、終戦迄に内容はできていなかった。七卷十二編からなる。

六 その他（参考資料等）

時期を限らず上記各項の参考となるもの

六一「第二回委員会ノ開催」(参考資料)

作成者外務省 B5 タイプ 昭和一九・二二・一五 二枚

これは副題で、主題は欠頁のため不明。

一一にある兵要地理調査研究会とは別に外務省が主催して開かれた「中国調査会」運営の方針決定のための文書と思われる。

学者は地理、歴史、社会、思想等幅広い各界の学者を網羅している。

第一回は十二月六日に開かれたと思われるが、その記録は残っていない。

当時外務省では中国と呼び、陸軍では支那と呼んでいた。従ってこの兵要地理資料集録の対象外であるが、地理学者の名前があったので参考までに収録した。

(注) サイズ B5 || 257 × 183 B4 || 247 × 366 ミ

リ(非定形の数値もミリ)